

書 評

Daniel A. Novak, *Realism, Photography, and
Nineteenth-Century Fiction*
(Cambridge: Cambridge University Press, 2008)

松 村 伸 一

コロンブスの卵と評すべきだろうか。ヴィクトリア朝時代の人々にとって、写真とは何であったか、また写真とリアリズムとの関係はどう捉えられていたのかについて、従来の見方を根底から覆す一書である。

写真論はここ数年来もっとも活況を呈しているジャンルのように思われる。ヴィクトリア朝における写真と文学との関係を論じた著書に限れば、リンゼイ・スミス、ジェニファー・グリーン＝ルイス、ナンシー・アームストロングらの研究書が90年代後半に続けて出版された。少々乱暴ながら、アームストロングの『写真時代のフィクション』(1999)は(この点ではグリーン＝ルイスの *Framing the Victorians* (1996) も同様だが)、監視と分類の手段として写真を読み解く、すぐれてフーコー的な試みの一環と見てよい。英語圏におけるこうした写真論の系譜は、アラン・セクラ(『身体とアーカイヴ』1986)やジョン・タッグ(『表象の重荷』1988)にさかのぼる。そしてダニエル・ノヴァックによる本書だが、ノヴァックの論旨を手短かに要約すること自体は、必ずしも難しい作業ではない。すなわち、写真というテクノロジーは、ヴィクトリア朝時代の理論・実践・言説いずれの面においても、その写実性ではなく、

1. 身体イメージを切断・交換・貼り付けなど加工可能なものとした
2. 被写体を抽象化・匿名化し、その個別性・アイデンティティを奪った点にこそ特徴があった、とまとめることができる。このようにノヴァックが主張するとき、彼が写真の典型として想定するのは、従来せいぜい風変わりなアノマリーくらいの取り上げ方をされることの多かった、オスカー・レイ

ランダー (1813-75) やヘンリー・ピーチ・ロビンソン (1830-1901) の制作した合成写真 (composite photography) である。これは、別々に撮影された複数のネガから人物や風景 (の一部) を組み合わせて、一枚の陽画を作成する手法で、現在から見れば途方もなく手間のかかる作業と思われるのだが、当のロビンソンに言わせれば、少年でもできる簡単な作業であるらしい (16頁)。とはいえ、技術的に合成写真の手法が主流だったかどうかが問題なのではない。ヴィクトリア朝時代の人々にとって、こうした合成写真的な写真のあり方こそが、写真というものの意味するところであったということ、写真的想像力を規制するモデルだったということが、ノヴァックの主張の眼目である。

こうした捉え方について、テキストでも画像でも「コピペ」したがるインターネット世代ならではの歪んだ視点ではないかという疑念を抱く向きもあるかもしれない。こうした疑念には、“After-image” と題された短い結語がある程度答えてくれる (私見では、ここから読み始めて、著者の射程を把握しておくほうが良いように思う)。ノヴァックは言う。デジタル時代の仮想空間に付随する胡散臭さも可能性も、すでにヴィクトリア朝人が写真を受け入れた時に感じ取っていたところと大きく変わらない。彼らの感性こそが、映画のモンタージュ技法の生みの親となったばかりでなく、また人種もジェンダーも超越した完全に民主的な空間となる可能性を秘めつつも諸々の問題を抱えた現在のヴァーチャル空間にとって、未来の道しるべとなるのだ、と。

“detestable introductions” という愉快なタイトルの序論では、ヴィクトリア朝写真史を簡潔にたどりつつ、写真がいかに普及当初からフォトコラージュ、レタッチなどの加工技術と不可分であったかを、豊富な図版で例証しつつ論じている。レイランダーとロビンソンが、合成写真のテクノロジーを用いて、実際のモデルの身体とは別の次元に属する新しい写真的身体を創造しようとする様が、ここで詳述されている。

第一章「行方不明の人々とモデルの／模範的身体：ヴィクトリア朝の写真的人物像」と第二章「小説の／新奇な身体を組み立てる：『リトル・ドリット』における身体とテキストの re-membering [原文のまま]」は、議論の流れがいささか錯綜している。まず第一章の冒頭では、ヴィクトリア朝時代、写真がいかに個人のアイデンティティを奪い、混乱させる装置として受け止められていたかを、具体的に例証している。また、写真家がしばしば拷問者、

死刑執行人や歯科医に例えられてきたことが指摘される。ただし、ここからノヴァックは、交換・再生産可能な労働者の身体というマルクスの一節に言及し、これを写真的身体論と定式化するのだが、果たして機械生産に組み込まれた部品という通常の解釈より有効と言えるのか。続けて、こうしてアイデンティティーを虚無化して写真的身体となることを、詩人ジョン・キーツの言葉を借用し *negative capabilities* (ネガ化する能力の意だろうか) と称している箇所とあわせて、首を傾げざるを得ない。

第一章の末尾と第二章の後半は、ディケンズを題材に、記憶／忘却と小説の全体性がテーマとなっている。小説の全体性とは、全体性なるものの存在を夢想させる(ノヴァックは「提喩によって表象させる」と言うが)断片性からこそ生まれるのだ、そしてそれゆえにリアリズム小説は写真的美学に拠っているとと言えるのだ、という逆説がここで展開される。間に挟まった第二章前半も、主題は小説の全体性なのだが、ルカーチのリアリズム小説論を補助線として考察を進めていて、独立した一節の感がある。もっとも、ディケンズの『リトル・ドリット』論としては、結局のところ、マードル夫妻の身体表象の比較が長々と述べられているので、本格的な議論を期待して読むと、肩すかしを食らう。ただし、絹布に刺繍された「忘れるなかれ」を意味する文字をめぐる、わずか2頁ほどの「結び」は、忘却と記憶の弁証法を小説の全体性獲得と関連づけて論じて、示唆的かもしれない。

第三章「模範的ユダヤ人：『ダニエル・デロンダ』における「文学的写真」とユダヤ人の身体」は、前二章がディケンズ研究者に与えるよりも、はるかに大きなインパクトを、エリオット研究者と写真史研究者に与えるだろう。ここでは、これまで多くの写真論で取り上げられてきたフランシス・ゴルトンの合成肖像写真と、ジョージ・エリオット最後の長編小説『ダニエル・デロンダ』の主人公の人物造型とを関連づけて論じている。ゴルトンの合成肖像写真は、アラン・セクラ以来、監視と管理の道具となる写真という制度の好例として多くの写真論で取り上げられてきた。これに対してノヴァックは、興味深い指摘を次々と繰り出す。まず、ゴルトン自身、ユダヤ人の類型に関わる仕事を、合成肖像写真を用いた自分の業績の中でも最高のものと評しているが(彼の関心は遺伝にあり、犯罪者の類型化が科学的とは考えていなかったようだ)、実はこの計画を最初に提案したのは、ユダヤ人の文人

学者ジョセフ・ジェイコブズという人物だったこと。ジェイコブズの計画のきっかけとなったのが『ダニエル・デロンダ』だったこと。また、両名ともこの合成肖像写真に関する論文を発表したが、ゴルトンはユダヤ人の類型についてはジェイコブズに譲り、ほとんどふれていないこと。そしてジェイコブズにとって、「ユダヤ人」（本来は単一人種と考えること自体に無理があるのだが）の類型とは、単なる人種類型ではなく、あらゆる人種の原型であったこと、などなどである。こうした指摘は、作品の主人公ダニエル・デロンダの、私心なく誰にでも共感する性格という設定と結びつけられる。デロンダの中立的で透明な性格こそ、すべての人種の典型であるユダヤ人種の典型として、未来を託される存在となるのだ、と本章は締めくくられる。

第四章「複製技術時代のセクシュアリティ：ワイルド、写真、アイデンティティ」の主題は、作者性とは何かである。ここで取り上げられるのが、オスカー・ワイルドをめぐる二つの裁判、すなわち、米国講演旅行中にワイルドを撮影した写真家ナポレオン・サロウニーが、あるリトグラフ会社を著作権侵害で訴えた裁判と、もちろんもう一つは、クインズベリー侯文書誹毀裁判である。前者ではサロウニーが写真イメージにとどまらずポーズにも著作権を求めて勝訴する過程をたどりながら、ワイルドの写真が表したのも、彼の個性ではなく、女性化した男性の典型という写真的身体だったと論じる。後者の裁判では、検察は『ドリアン・グレイの絵』を証拠として取り上げることで、虚構の登場人物を写真的身体（それ自体の個性を持たないがゆえに作者自身をよく表現している身体）として法廷に導き入れたのだとノヴァックは主張する。この裁判についてフォーコーが、禁じられた行為を犯したためでなく、同性愛者という「種」に属するがゆえに人を裁いた初めての裁判だったと位置づけたことはよく知られているが、ノヴァックは、ここに見るべきは行為から主体への変化でなく、主体性そのものの変容ではないかと指摘しているわけである。続いて、ダンディーの身体の分断性、シビル・ヴェインの身体、ドリアン・グレイとその肖像画の関係なども、写真的身体概念で解きほぐされていく。本章も刺激に富む興味深い論文であった。

ノヴァックの論述スタイルには、良くも悪くも、才気走った若手研究者のペーパーを聞いているような趣がある。私自身の不満は、結局のところ、単一の着想ですべてを説明してしまう、見事さと裏腹の退屈さかもしれない。

拙文の冒頭でノヴァックの論旨を要約するのは容易だと述べたのは、全編を通して執拗に同じ論旨が繰り返されていたからだ。「これまで論じてきたとおり」、「言い換えれば」という二種類の言い回しが相当な頻度で出てくるのは、懇切丁寧ではあるが、議論が堂々巡りしている印象を強める。巧妙な地口やくびき語法 (zeugma) めいた言い回しも、口頭発表であれば大向こうをうならせるだろうが、印刷媒体ではいささか上滑り気味である。ただ、これについては、写真用語と日常語との重複の多さが誘発するものか、とも思い直した。あるいは、現実を写そうとするリアリズムそのものが、批評言語にまで同語反復を要請してしまうのだろうか。ともあれ、ナンシー・アームストロングが序論につけたタイトル「リアリズムにおいてリアルなものとは何か」という同語反復的な問いは、まだまだ問い直し続けるに値するだろう。